

平成29年度「入院児童生徒等への教育保障体制整備事業」
成果報告書

教育委員会名	京都市教育委員会
事業開始年度	平成29年度

Ⅱ 詳細報告

1. 推進地域の概要

(1) 推進地域内の児童生徒等の状況 (平成27年5月1日現在) ※公立のみ

(参考:平成25年度「長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査」の回答様式を参考に記載)

①推進地域内の全学校のうち、病気やけがにより転学等を行った児童生徒数

小学校	中学校	義務教育学校	高等学校	中等教育学校	特別支援学校	合計
42人	18人	0人	0人	0人	3人	63人

②推進地域内の全学校のうち、長期入院(年間延べ30課業日以上)した児童生徒数

小学校	中学校	義務教育学校	高等学校	中等教育学校	特別支援学校	合計
22人	16人	0人	2人	0人	4人	44人

2. 事業の内容

(1) 現状の分析と事業の目的

【体制整備・連携方法について(公募要領(イ))】

(イ)後期中等教育を受ける入院生徒が、退院後に復学又は転学を円滑に行えるよう、関係機関の連携方法
構築に関する研究

京都市における病弱教育を中心的に担っている京都市立桃陽総合支援学校(以下、桃陽)では、京都市桃陽病院に入院している小・中学生が通う本校と、京都市内の4つの病院(京都大学医学部附属病院・京都府立医科大学附属病院・国立病院機構京都医療センター・京都第二赤十字病院)内にある分教室で、入院により転籍した小・中学生の教育を行っている他、分教室設置病院以外に入院している小・中学生のための訪問教育も行っている。また、桃陽には高等部の設置はないが、センター的機能を担う「支援部」を設置し、地域の相談業務や学習支援を行っており、入院している高等学校相当生徒(以下、高校生)への支援については、地域支援の一環として支援部を中心に行っている。特に、29年度は、医療関係者や、京都府下及び京都市内の高等学校と連携しながら取り組みを進めた。

高校生支援に当たり、28年度に引き続き、高校生の入院情報を得るための課題(課題Ⅰ)、学習のモチベーションを維持するための課題(課題Ⅱ)、在籍高校との連携についての課題(課題Ⅲ)、以上の3つが研究開始当初の主な課題であった。

課題Ⅰ 高校生の入院情報を得るための課題

小児科以外の診療科に入院している生徒についての情報を得るために、リーフレットを活用した病院全体への周知及び病院スタッフとのケース会議を定期的に行うこと等が必要であると考えた。

課題Ⅱ 学習のモチベーションを維持するための課題

学習会(以下「学習会」)では学習空白を埋めること及び、学習のモチベーション維持を目的として学習

の場を設定して行っている。自学自習を基本としているが、学習支援を行える人員も必要であり、その人材確保も課題である。一方で、様々な状況の高校生がいることから、ICTを活用する等、学習会の内容を工夫することも必要である。

課題Ⅲ 在籍高校との連携についての課題

これまでの高校生支援では、医療関係者や在籍高校との連携が十分に取れない状況であった。高校生への教育の主体はあくまでも在籍高校であるが、各高等学校と連携し、ICTを活用した復学支援等、可能な限りの取組を推進していきたい。

小・中学部しかない桃陽にとって、高校とどのように連携していくか、どのような連携が可能であるか等を具体化していくことが課題である。

【教育機会確保について（公募要領（エ）・（オ））】

（エ）入院児童生徒等に対するタブレット端末等ICT機器及び通信機器等の有効な活用方法の研究

課題Ⅰ

入院児童生徒については同じ学年の児童生徒がいない場合が多いため、意見交換をしながら学ぶ機会が限られている。また、原籍校のクラスや友達の様子・授業の進み具合などが気になり不安感・孤立感を持ちがちである。このような状況を改善する1つの手段として、ICTの活用により、本校や別の分教室をつなげて集団の場を確保することが考えられる。

課題Ⅱ

さらに、本校と分教室、分教室同士をつないでの学習や行事の実施は比較的可能であるが、分教室設置病院の中でも病状により、病室から出られない児童生徒もいるため、学習保障の一助として、ネットワーク回線が来ていない場所でもICTを活用した学習にモバイルルーター等を使用するなどして工夫していく必要がある。

（オ）入院児童生徒等への復学又は転学を見据えた交流及び共同学習に関する研究

課題Ⅰ

円滑な復学に向けた交流及び共同学習のあり方について具体的な事例を積み上げる。特に、修学旅行等の主要な学校行事には病状が安定していれば参加する方向にあるため、その事前学習といった内容での交流及び共同学習が考えられる。ここでは、双方向の交流が行えるICTを使った「交流及び共同学習」のあり方を研究する。

課題Ⅱ

自宅療養期間中の原籍校との連携のあり方について具体的な事例を積み上げる。治療が終わり退院できてもしばらく自宅で療養しなければならず、原籍校に登校できないケースがある。学習保障の一手段として、自宅と原籍校とをICTを活用してつなぐということにあたっては、桃陽がコーディネーターとして参画しながら、ハード面の整備や個人情報保護のあり方についても検討していく。

(2) 事業内容と成果

●学校・病院連携支援員（コーディネーター）の活用実績と成果

主な経歴・資格	活動内容実績（回数、活動形態）
分教室担当教員（京都市立桃陽総合支援学校教員）	<ul style="list-style-type: none"> ・病院スタッフとの情報交換（ケース会議参加等） ・学習支援ボランティア確保のための活動 ・ICT活用した支援を推進するための活動
具体的な活動内容と役割	活動の成果
<ul style="list-style-type: none"> ○学習支援ボランティアの確保のための活動 <ul style="list-style-type: none"> ・大学教授への協力要請・連絡・調整 ・学生への説明会・打合せ・面談 ○ICT活用した支援を推進するための活動 <ul style="list-style-type: none"> ・原籍校訪問・下見，機器の貸出・設置・調整，機器の扱い方のレクチャー ・分教室（ベッドサイドも含む）での機器の設置・調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・入院児童生徒の情報が得られた。 ・桃陽の取組周知ができた。 ・学習支援ボランティアの確保ができた。 ・ICTを活用した交流及び共同学習の取組が進んだ。

●学習の補充支援員の活用実績及び役割

主な経歴・資格（人数）	活動内容実績（回数，活動形態，対象）
大学院生 3名	場所：京都大学医学部附属病院・京都府立医大病院 対象：入院中の高校生
具体的な活動内容と役割	活動の成果
<ul style="list-style-type: none"> ・自主学習や高校からの課題に対する学習支援 ・学生ボランティアや同年代の高校生との交流の場としての関わり（情報交換・意見交流等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題提出の日に向けて，学習課題を完了することができた。 ・年齢の近い学生ボランティアの学生生活の話聞くことで，退院後の生活に希望がもてるようになった。 ・他にもテレビ会議システムで桃陽総合支援学校に来ている介護等体験の大学生たちと交流を行いバリエーションを広げた。

【体制整備・連携方法について（公募要領（イ））】

(イ) 後期中等教育を受ける入院生徒が，退院後に復学又は転学を円滑に行えるよう，関係機関の連携方法構築に関する研究

①取組内容と成果

高校生支援については分教室設置病院である京都大学医科部附属病院（以下，京大病院）及び京都府立医科大学附属病院（以下，府立医大病院）の2つの病院内に，下記の通り定期的な学びの場として学習会を設定した。また，高校生支援の取組の周知や学習の場の充実を図るため連携をとった機関は下記の通りである。

学習会	【京大病院】	【府立医大病院】
	場所：当直室 時間：毎週月 10：30～12：00 毎週月・水・金 15：30～16：50	場所：分教室 時間：毎週水 15：20～16：20 ※他に週2回ボランティアが来て学習支援

連携 機関	<ul style="list-style-type: none"> ・小児科（医師，看護師長，看護師，保育士など） ・移植病棟（医師，看護師長，看護師など） ・がん相談支援センター 小児がん専門相談員・医療ソーシャルワーカー ・医療サービス課医務企画掛 ボランティア担当 ・小児科病棟ボランティア「にこにこトマト」 ・医療情報企画部 ・京都府健康福祉部 子ども総合対策課 ・花園大学 教授 ・各高等学校 	<ul style="list-style-type: none"> ・小児科（医師，看護師長，看護師，保育士など） ・整形外科（医師，看護師長，看護師，保育士など） ・ノートルダム大学 教授 ・京都府健康福祉部 子ども総合対策課 ・各高等学校
----------	---	---

【課題Ⅰに関する取組と成果】

高校生の入院情報を得るための連携について

桃陽で高校生支援を行っている病院において，小児科の医師・看護師長以外からの情報を得ることができるようにするために，高校生支援に関するリーフレットを大学病院内の別の病棟にも置き，小児科の看護師長より看護師長会で紹介してもらった。

京大病院では，がん相談支援センターの小児がん専門相談員・医療ソーシャルワーカーと連携した。高校生の入院情報を得るだけでなく，高校生支援についての具体的な情報を求められたのでリーフレット掲載内容以外についても，特に病院や当事者・保護者の関心が高い遠隔教育の制度について説明した。府立医大病院においても，高校生支援への関心は高く，具体的な制度に関することや高校の状況等についての情報を提供した。詳しくは後述する府立医大病院に入院する府立高等学校生徒を対象に，京都府が実施している「小児慢性特性疾患支援事業」の制度により派遣された学習サポーターを活用し復学につなげた取組や，京大病院に入院する市立高等学校生徒の遠隔教育の試行においては，両病院と連絡を取り合いながら取り組んできたが，この取組を通して，ケース会議において高校生支援をするための具体的な情報交換を行った。特に制度面について病院から情報提供を求められ共通理解を深めることができた。

【課題Ⅱに関する取組と成果】

高校生の学習モチベーションを維持するための取組

昨年度に引き続き，支援に係る人員確保という課題に対し，学生ボランティア募集については，京大病院や府立医科大学だけでなく，京都市内の他の大学の教官に依頼し，今年度は3名のボランティアを確保した。

学習支援に取り組んでもらい，幅広く高校から出されている課題についての質問に応じてもらった。また，テレビ会議システムで桃陽本校に介護等体験で来校している学生たちとの交流を深めた。

学習会という定期的な場の設定を持つことは，高校生自身に目標ができ，学習会に出たりテレビ会議システムに応じたりすることが，生活リズムが整うきっかけとなっている。病室での自主学習は困難だが，学習のために集まる場があること自体に意味があり学習が進むことにつながっている。また，学習支援の場に出向き，学生ボランティアや教員といろいろな話をするすることで，先の見通しがもてたり，気分転換になったりするなど，学力面だけでなく学習や治療に向かうモチベーション維持につなげることができた。

桃陽が主催する学習会では「教科学習の支援」とともに「同世代の友達との交流や高校生が求める情報の提供」にも取り組んだ。学習会に参加する高校生は在籍する高校もそれぞれに異なり、個々により学習会へのニーズも異なる。教科の学習に熱心に取り組む生徒、おしゃべりを楽しみたい生徒など様々である。しかし、どの生徒も病室を出て学習会に参加するとき、患者から高校生に戻るができるひと時である。参加者の感想からも、病気入院中でも高校生らしく過ごしたいという自然な思いが感じられる。

高校生支援の広報について、従前より高校生支援に取り組んできた京大病院と府立医大病院では小児科医以外の診療科へも高校生支援のリーフレットの設置をお願いした。さらに、思春期外来などを設置している病院等にもリーフレットを持参し、入院する高校生へ学習支援に取り組んでいることなどについて広報を進めた。その結果、今年度は小児科以外の病棟や思春期外来を設置する病院に入院する高校生からも学習会への申し込みがあった。

【学習会への参加者の状況等】

	参加者/入院科/入院期間	参加の動機・きっかけ	入院・参加・学習の様子
A	京都府私立通信制高校1年女子 (小児科/6週間, 10日間, 1週間)	小児科病棟からの紹介。	入院当初に通学から通信制課程へ変更。短期間の入院(1~2週間の入院を4回)を繰返し、入院のたびに学習会に参加。
B	京都府立高校1年女子 (腎臓内科/1ヵ月間)	ナースステーションのリーフレットを見て保護者と申し込む。	ノートなど友達に送ってもらい、学校の教科書を使った学習を進めた。
C	他府県私立全日制高校2年女子 (脳神経外科/1ヵ月間)	ナースステーションからの紹介。ナースステーション経由で参加を申し込む。	「病室を出ることができる状況になれば参加」という申込。2回参加後退院。
D	他府県私立通信制高校2年女子 (小児科/8ヵ月間)	小児科病棟からの紹介。	半年分の通信制の課題を事前に配布される。学習会では担当者と読書や趣味、音楽の話題などを楽しむことも多かった。
E	京都府立高校1年男子 (小児科/3ヵ月間)	小児科病棟からの紹介。	院内受験後、入院継続。高校には一度も行っていない。病院主催の学習会や学習サポート事業にも参加。体調や治療の関係で、どの学習会にも参加が少なかった。高校と連携を図り高校の様子などを配信。
F	京都府立高校1年男子 (小児科/4ヵ月間)	小児科病棟からの紹介。	ベッドサイドで「在籍高校からの配信授業の視聴」を中心に取り組んだ。
G	京都府私立高校在宅科2年女子 (精神科/3ヵ月間)	桃陽から病院へ学習会の広報。治療上の有効性を期待した医師より当該生徒へ紹介。	高校から配信されるオンデマンド型の授業を視聴しレポート作成などを進めた。時には当該生徒の話を傾聴したり、手芸などの活動に取り組んだ。

【主な取組の様子】

①学生ボランティアとの学習

平成29年度の学生ボランティアは、京大病院に3名の大学院生の登録があった。学生ボランティアは桃陽主催の学習会に参加し、高校生が持参した問題集や在籍高校の課題と一緒に取り組むなどの活動が計7回あった。

②授業動画配信サイト等の活用

学習会について、参加者のニーズは様々である。「勉強を教えてもらう場所」ではなく「色々なことが質問できる場所」「自学自習ができる場所」として運営した。教科の学習については授業動画配信サイトを活用した。また、様々な学習サイトを活用して「誰かに教えてもらう」だけでなく、自分の学習に必要な情報が得られるように工夫した。

③同世代の友達や大学生等との交流

同じ年代や少し年上の年代の若者と交流することは、青年期の発達においては大切である。病院関係者との情報交換の場では「高校生支援では教科学習だけにとどまらず、高校生が感じる不安や、将来展望につながる話題について話し合える場も必要に感じる。」という意見もあり、テレビ会議を活用して入院する高校生同士をつなぐピアサポートや、本校に実習に来る大学生との交流に取り組んだ。

④オンデマンド型配信授業の視聴

思春期外来への通院から入院に至った通信制高校在籍の高校生にオンデマンド型の授業の視聴が継続できるよう支援した。学習支援終了後は病院関係者から「社会や学校との接点につながる支援で、とても大切だと思った。今後も入院された高校生には紹介したい」という感想があった。

【参加者の感想】

参加者の主な感想は以下の通りである。「①学習会の場はあなたにとって」「②その理由は?」「③学習会に望むことは?」「④学習・活動内容」

	①/③	②	④
A	とても良い 単位認定して ほしい	高校生支援をやり始めて忙しくなった。楽しかった。病棟から外出することができた。 (高校は60日登校すれば進級できる)	作文, 生物, 体育等全10教科の高校の課題。
B	とても良い 現状に満足	分かりやすく教えてもらったし楽しかった。	学校の教科書を使った学習。
D	とても良い 現状に満足	お話しすることが楽しい。歩いて出てくることがリハビリになる。一人じゃない。勉強できる。	高校の課題, 問題集, 読書, 趣味や音楽の話など。
G	とても良い 現状に満足	親身になって話を聞いたり勉強が一緒にできる。パソコンで勉強する学校なので助かった。	高校からの配信授業の視聴と学習。手芸他。

【課題Ⅲに関する取組と成果】

在籍高校との連携については、病院からの情報を桃陽のコーディネーターが受けて、高校生本人のニーズを確認したうえで、桃陽の校長に連絡を入れる。桃陽の校長から生徒が在籍する高校の校長へ連絡を入れ、本人に対する支援を行いたいと考えていることや、本人の在籍高校に対する希望を伝えている。本年度は府立医大病院2件、京大病院1件の計3件の高校生支援依頼があった。校長間では何らかの高校生支援の取組を桃陽と連携しながら取り組むことを確認し、それぞれ窓口となる教員を決めた。府立医大病院の2件のケースはいずれも京都府立高校であり、京大病院の1件は京都市立高校であった。京都市立高校は桃陽と設置者が同じであり、校長同士ももともとつながりがあるという状況であった。

京都府立高校の事例は、単位取得そのものを目的としたものではなかったが、1件は生徒が高校とテレビ会議システムを使った交流を深めることで復学へのモチベーションを高めることになった。さらに1件は、高校の教室の授業を生徒に配信し、出席認定になるものではないが、入院期間中の学習空白を作らない結果となった。京都市立高校の事例では、遠隔教育を試行した。3か月の入院であったがテレビ会議システムでの授業参加は出席認定されるとともに、本人の学習や関病へのモチベーションを高めたり、クラスメイトが積極的に本人を支援する等、単位認定・卒業につながることに以外にも大きな効果があった。

【事例①】

在籍高校との連携のあり方 ～京都府の学習サポート事業との連携事例～

高校受験直前に府立医大病院に入院した中学3年生の生徒について、院内受験で高校に合格したが、高校進学後も入院生活が続いたため、京都府が実施している「京都府小児慢性特定疾病児童等学習支援事業（学習サポート事業）」（注）を活用することとなった。

当該生徒は桃陽の高校生支援にも参加し、府立医大病院の夜の学習会にも参加していた。院内受験の際には在籍中学校等から相談を受け協力した経緯もあり、当該生徒が「学習サポート事業」を受けるにあたり、桃陽は当該高校と医療関係者のカンファレンスをコーディネートした。「退院後、当該生徒が登校しやすい支援につなげたい」という当該高校の願いを受け、桃陽はICTを活用した支援を提案し連携を図った。

ベッドサイドでの学習が多くなりがちであった当該生徒であるが、府立医大病院との連携の中、ベッドサイドで高校の様子をテレビ会議システムやビデオトークアプリで視聴することができた。その結果、一年間の休学を申し出ていた当該生徒は、退院後の復学を決意し、退院後、体調管理を図りながら登校している。

（注）京都府小児慢性特定疾病児童等学習支援事業：京都府立高等学校に通う一定の要件を満たした小児慢性疾病児童生徒等を対象として、学習サポーターを派遣し学習支援を行う事業。

【使用機材】

使用機材	病院	高校	使用場面
ノートPC	1台	1台	文化祭、校内の様子配信
タブレット	1台	1台	シータカメラ映像配信、ビデオトーク
360度（シータ）カメラ		1台	校内の様子、体育祭などの撮影
モバイルルーター	1台	1台	病院・学校タブレット使用時

【接続について】

府立医大病院の無線LANには京都市教育ネットワーク（学習系）が接続されている。本事例では当該高校は京都市教育委員会が契約しているNTT Meeting Plazaへ接続し、京都市のテレビ会議システムを使用し学校の様子を配信した。また、無線環境のない場所での学校行事の配信については桃陽からモバイルルーターを貸与し、ビデオトークアプリを使って配信するなど、ネットワーク環境が整うように支援した。

【主な取組の様子】

① ICT機器を活用した文化祭や体育祭の配信

一度も高校に登校したことがない当該生徒は、春には1学期間の休学を申し出ていた。しかし、体調不良のため、週に3日の学習サポートも受けられない状況が続いた。そのようなことから、夏には1年間の休学を決意した。学習サポートの担当者は当該生徒の励みになる取組について桃陽と相談し、当該生徒が入学後、一度も通ったことがない高校の様子について、配信して見せることを計画した。具体的には、ICT機器を活用し文化祭と体育祭の配信を計画した。学習サポーターはこの取組を学習支援が行えた折に、当該生徒に提案した。当該生徒は配信を希望したので、学習サポーターは文化祭等の冊子を手渡し、配信のスケジュールなどを確認した。高校の生徒には担任を通して取組の概要を事前に説明した。

文化祭は3日間配信された。高校の配信については学習サポーターが担当し、ベッドサイドでの受信については桃陽が支援した。配信期間中の当該生徒の体調なども桃陽が病院に確認し、配信の可否について高校へ知らせた。配信用の機材は桃陽から貸与し、回線については京都市教育ネットワーク（学習系）を活用した。

配信初日には、当該生徒は初対面となるクラスメイトと画面越しに手を振るなど挨拶を交わした。開会式の校歌斉唱で、当該生徒は初めて自分が入学した高校の校歌を聞いた。2日目には、模擬店の賑わう様子や校内の様子が配信された。学習サポーターは配信用の機材に「中継中」と書いた用紙を貼り、校内を案内していた。すれ違う高校の生徒も関心を示し、カメラに向かって手を振るなど当該生徒と交流する様子もあった。

体育祭は無線環境がない陸上競技場が会場であったため、桃陽よりモバイルルーターとタブレットを貸与し、ビデオトークアプリを使って送受信をした。当該生徒は、明るい表情で視聴し「よかったです」という感想を述べていた。

配信側の学習サポーターは画面越しに見る当該生徒の様子について「表情も明るく、思ったよりも喜んでもらったという手応えがあった。同世代の生徒たちの明るい表情や、活発な行動を見て、何かしらの影響はあったように思う。」と感想を述べていた。その後、当該生徒は高校の担任との面談で「勉強にはついていけないかも知れないが、どんな学校か行ってみてもいいと思った。」と復学を申し出た。

②退院に向けたカンファレンス

復学を申し出た当該生徒の退院が決まり、医療関係者、学校関係者、本人・保護者のカンファレンスを桃陽がコーディネートした。

カンファレンスでは、医療関係者から退院後の治療計画や感染予防と登校についての説明があり、高校からは授業の計画や登校の際の配慮についての質問があった。当該生徒の希望は、一度も会ったことのないクラスメイトと退院前に挨拶をして交流したいということだった。高校へは行ってみたいが、いきなり初対面のクラスメイトの中に入っていきには勇気がいる。「可能ならば事前に友達と挨拶を交わしたい。」という意見を当該生徒がカンファレンスで述べた。配信に際しては桃陽からモバイルルーターとタブレットを高校に貸与し、ベッドサイドの受信について支援した。クラスメイト全員と順番に「よろしく」と声をかけあい当該生徒が手を振る様子からは、復学を楽しみにしている様子が伺われた。

【事例②】

医療と教育の連携（医教連携）～出席日数を考慮した治療計画と学習の継続を配慮した授業配信～

府立医大病院に入院した高校1年生の生徒について、高校生支援の依頼が小児科病棟からあった。「京都府の学習サポート事業への参加」「府立医大病院主催の夜の学習会」「桃陽の高校生学習会」に参加したいという内容であった。そこで、桃陽の高校生支援について当該生徒へ紹介するとともに、医療関係者と高校関係者、当該生徒の保護者のカンファレンスを桃陽がコーディネートした。その結果、医療関係者と高校が連携を図り、当該生徒の進級に向けて、出席日数を考慮した治療計画を立て、学習の継続を図ることができた。

【使用機材】

使用機材	病院	高校	使用場面
タブレット	1台	1台	ビデオトークアプリを使った授業配信・受信
モバイルルーター	1台	1台	病院・学校タブレット使用时

【接続について】

府立医大病院の無線LANには京都市教育ネットワーク（学習系）が接続されている。今回の授業配信において府立高校は、京都市教育ネットワークを使うか京都府のネットワークを使うか検討された。桃陽と高校の間では、京都市教育ネットワークを使ったテスト通信とモバイルルーターを使った接続を試行した。その結果、自宅療養期間中や他府県での治療期間があることも考慮し、授業配信ではモバイルルーターとビデオトークアプリを入れたタブレットを使用することとした。

【主な取組の様子】

①カンファレンスの概要

医療関係者、高校関係者、保護者のカンファレンスでは当該生徒の治療概要と授業計画概要が提示され、話し合われた。保護者からは治療や学習に関する質問などがあった。

当該生徒の治療計画は、投薬治療などを含め3ヵ月の入院予定で、別に他府県での治療が2週間程度計画されていた。病院からは当該生徒の治療の励みのためにも、学習が継続できる環境を工夫してほしいという願いが話された。当該生徒は退院後3週間の自宅療養期間があり、その間に出席日数が必要な教科等、状況に応じて登校してよいという計画であった。

保護者と本人が希望していた学習サポート事業については担当者が見つからず、実施できない状況であった。高校からは、1月下旬の他府県での治療期間も含め入院期間中の授業配信の提案があった。

桃陽は授業配信の支援について、当該生徒と高校にモバイルルーターとタブレットを貸与した。当該生徒は自宅への外泊や他府県での治療期間中は自宅や滞在先のネットワーク環境と当該生徒所有のタブレットを使用した。

②配信授業の概要

高校はモバイルルーターと桃陽から貸与したタブレットを使って授業を配信した。授業配信は、当該生徒の体調を配慮し終日治療のある日は配信せず、午後からの治療の日は午前中だけ配信するというように進められた。受信側には教員はつかず、受信の準備やタブレットの操作は当該生徒が全て行った。授業は学級の時間割に沿い、配信可能な教科は全て配信された。入院期間中、定期テストなどを受けることができなかった当該生徒は、冬休み中の補習講座を受講した。

他府県での通院治療期間中は、治療開始が15時頃からであったため、高校は全授業を配信した。当該生徒は終日授業を視聴し、学級の生徒と交流もできた。

配信を進めるうちに授業は発問や質問を交わす双方向型の授業になっていった。生徒同士が意見交換をして進める学習（ペアワーク）にも当該生徒は参加した。

授業配信では通信状況が途切れてしまうような不測の事態も予測される。高校では、タブレットを設置している場所に近い生徒が、通信が途切れた時には担当教員に知らせ、接続を続けることができるよう協力した。「そのような生徒たちの協力があり、授業配信は円滑に進めることができた」と高校から感想があった。

出席認定にはならない取組であったが、入院期間中、当該生徒はベッドサイドや自宅、滞在先で学習を継続することができた。

授業配信中、当該生徒はクラスメイトと、ビデオトーク上のスタンプやメッセージ等でやりとりし、楽し

くコミュニケーションを図っていた。そのことが入院中の安心感となり、退院後の登校の不安軽減につながった。長期入院する高校生にとって、「今」を共有できる双方向の通信環境を整えることは、学校生活の継続が実感でき、入院生活にありがちな孤独感を払拭することができた。そのような当該生徒の気持ちは治療意欲にもつながった。当該生徒は退院後、体調の許す限り元気に登校し、進級もできた。

③医療と教育の連携及びコーディネートの必要性

当該生徒の学習の継続の為に、授業配信は大変有効であった。それを可能にした背景には「医療と教育」の連携があった。「医療と教育」の連携を進めるためには、「コーディネーター」の役割が大切である。本事例においては、高校生が入院した際に、病院から桃陽の地域支援担当にすぐ連絡が入った。桃陽は当該生徒や保護者の願いを確認し、関係機関が連携を図る機会を速やかにコーディネートすることができた。長期入院で高校に行けなくてもICTを活用して学校とつながっていたことは当該生徒の安心感を育んだ。

「医療と教育」が連携して当該生徒の学習継続に取り組み、進級につながる事ができた貴重な実践事例である。病弱支援学校のセンター機能が医療等関係機関のコーディネートを進めることは必要かつ有効であることを感じる事例であった。

【事例③】

遠隔教育の取組 ～京都市立高校との連携～

京大病院の医療ソーシャルワーカーの方より、「京都市立高校の3年生が京大病院に入院し、今後の進路について、悩んでいる」という連絡があった。桃陽は高校とケース会議を持ち、「平成27年4月より高等学校の全日制・定時制課程における遠隔教育を正規の授業として制度化する」ことについての情報を提供した。高校は遠隔教育の可能性について関係機関と相談を進めた。

桃陽は、本人、保護者、医療関係者、高校関係者のカンファレンスをコーディネートした。「学習の継続は本人の治療意欲の向上に不可欠」という病院の意見や「今の高校で卒業したい」という本人・保護者の意向が伝えられる中、高校からは「遠隔教育で出席を認めたい」という方向が示された。桃陽は高校と協力して遠隔教育について検討し取組を進めた。治療期間が比較的短かったこと、遠隔教育ができるICT環境があったこと、桃陽の高等学校免許所有教員に当該高校との兼務発令が可能であったこと等、条件がうまく重なり、単位認定につながる出席扱いの遠隔教育が実施できた。

【使用機材】

使用機材	病院	高校	使用場面
タブレット	2台	2台	授業全般配信・受信
リモートカメラ		1台	板書等を受信側でフォーカス
ミニプロジェクター	1台		授業映像を壁面に映写
モバイルプリンター	1台		受信プリントの印刷
モバイルルーター	1台		病院側無線
タブレットホルダー		2台	タブレット設置

【接続について】

京大病院の無線LANには京都市教育ネットワーク（学習系）が接続されている。しかし、今回の遠隔教育では高校の無線環境が京都市教育委員会のネットワーク環境とは異なっていたため、京都市教育ネットワ

ーク（学習系）を利用したテレビ会議システムは使用しなかった。両校が同じタブレットを複数台所有していたため、ビデオトークアプリを使って遠隔教育を行うこととした。病院ではモバイルルーターを使用しネットワーク環境を整えた。

【主な取組の様子】

①高校の使用機材

校内からの授業については高校が所有するタブレットを使い、高校の無線回線を使い配信した。体育館や運動場など、無線環境がない場所からの配信については桃陽よりモバイルルーターを貸与し、体育の授業などを配信した。病院の生徒がノートをとるためには板書全体が見える必要があった。そのために黒板の左右から2台のタブレットを使用し板書を配信した。病院の生徒の「自分が必要なところをフォーカスして見たい」という希望に応えるために、高校にリモートカメラを設置した。リモートカメラでは体育祭や実習授業の実習の様子なども配信された。

②病院の使用機材

授業視聴において当該生徒の一番の希望は「板書が良く見えること」であった。学校から2台のタブレットで配信される板書を2台のタブレットで視聴し、ノートをとったり、プリントを記入したりしていた。

次第に板書の文字や資料など、自分が見たいところをはっきり見たいという思いが強くなり、その希望に応えるために高校にリモートカメラを設置した。高校からの授業プリントを当該生徒が受け取るために病院にモバイルプリンターを設置した。体育の授業や学年集会などはミニプロジェクターを使って学習室の壁面などに映し、大きな画面で視聴できるように工夫した。

③授業の様子

遠隔教育を始めるにあたり、機材の設営や操作について高校の教員の負担になるのではないかとということが懸念材料の一つとしてあった。しかし実際に授業が始まると、高校と病院をつなぐ双方向型の授業が普段の授業の姿となっていった。授業者は病院の生徒に声をかけ、病院の生徒は発問に答えたり、教科書を音読するような授業場面もあった。

高校の生徒たちは機材の設営などについて、授業者の立ち位置や病院の生徒の見やすさを配慮しながら積極的に協力した。授業プリントも、高校の生徒がタブレットで撮影し、病院のタブレットへ送信してくれるようになった。病院の生徒はモバイルプリンターでプリントアウトし授業を受けることができた。移動教室では高校の生徒がタブレットを持って移動した。病院の生徒は音声の不具合や診察に行く場合など、自分の状況をメモに書いてタブレットを通して高校へ知らせようと工夫していた。離れていても一体感のある学習風景が創造されていった。高校はクラウド版の協働学習システムを使った遠隔教育も試みた。当該生徒は遠隔教育の期間が高校生活で一番勉強した時間だったと言う。自分を支えてくれる多くの人々への感謝をよく語っていた。高校からは、生徒たちに思いやりの心が育まれていく様子を感じられたと感想があった。

【教育機会確保について（公募要領（エ）・（オ））】

①取組内容と成果

（エ）入院児童生徒等に対するタブレット端末等ICT機器及び通信機器等の有効な活用方法の研究

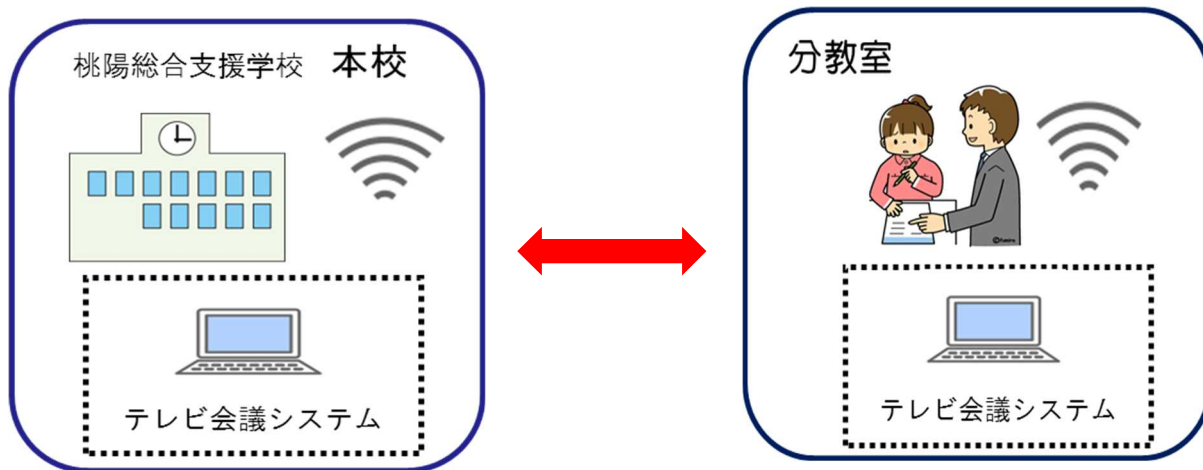
従前に引き続き、タブレット端末やモバイルルーター等のICT機器及び通信機器を有効利用し、学習集団を確保するとともに、さらに進んで、主体的で対話的で深い学びを意識した授業を展開できるような工夫を行ってきた。

【事例④】

集団での学び 主体的な学びを保障 ～分教室と桃陽本校をテレビ会議でつないで～

6年生の国語の単元「学級討論会をしよう」は、「討論会の話題にそって、互いの立場や意図をはっきりさせながら、疑問点を整理して自分の意見を言ったり、話し手の意図をとらえながら聞いたりして討論することができるようにする」ことをねらいとしている。

病院分教室の6年生の在籍が1名であったため、本校6年生の学級と病院分教室をテレビ会議でつなぎ、本単元の学習を行った。



【使用機器・システム】

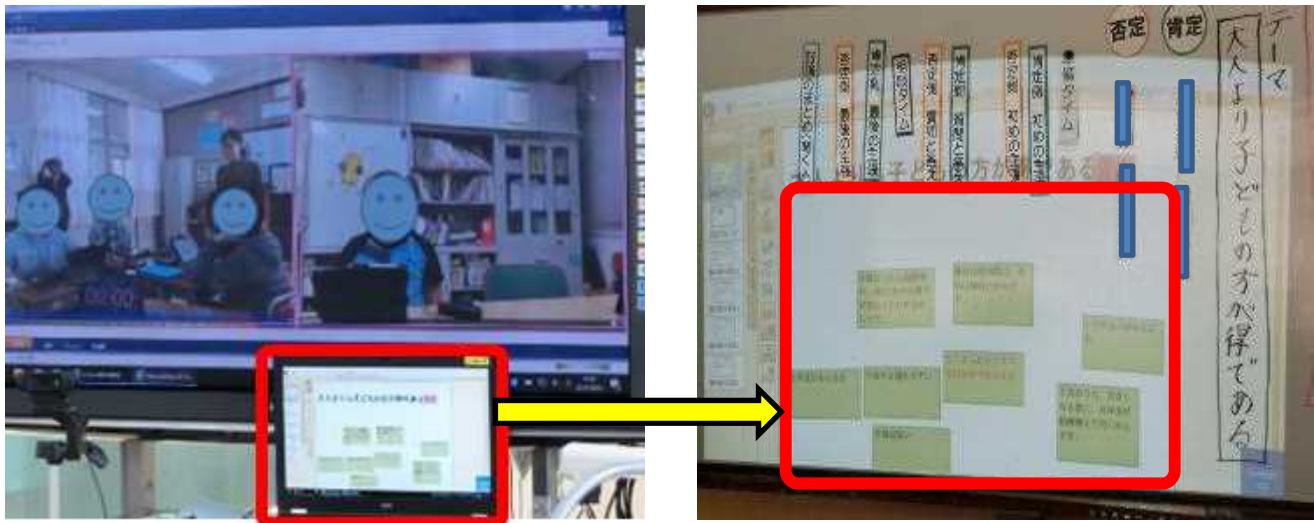
本校	病院分教室
電子黒板 コンピュータ（教室機） タブレットPC（児童数） Webカメラ マイクスピーカー USB延長ケーブル プロジェクター（ホワイトボードに投影）	電子黒板 コンピュータ（教室機） タブレットPC（児童数） Webカメラ マイクスピーカー USB延長ケーブル
テレビ会議システム 協働学習システム（ノートをネット上で共有し同時共同編集が可能）	

【取組の様子】

討論会は次のような流れで行った。

- ・テーマに対し、肯定グループと否定グループに分かれ、一人一人の意見をネット上のノートに書き込む。
- ・書き込んだ内容をもとに主張の内容や順番などを相談する。
- ・それぞれのグループが主張と質疑応答を行う。
- ・前半の討論をもとにグループで意見をまとめ、最後の主張を行う。
- ・参観者（分教室、本校の教員）が討論についての講評を述べ評価する。

※合同の討論会の前に、本校だけで別のテーマで討論会を行い、分教室児童はその際の討論の方法をネット上のノートなどを見て把握するようにした。



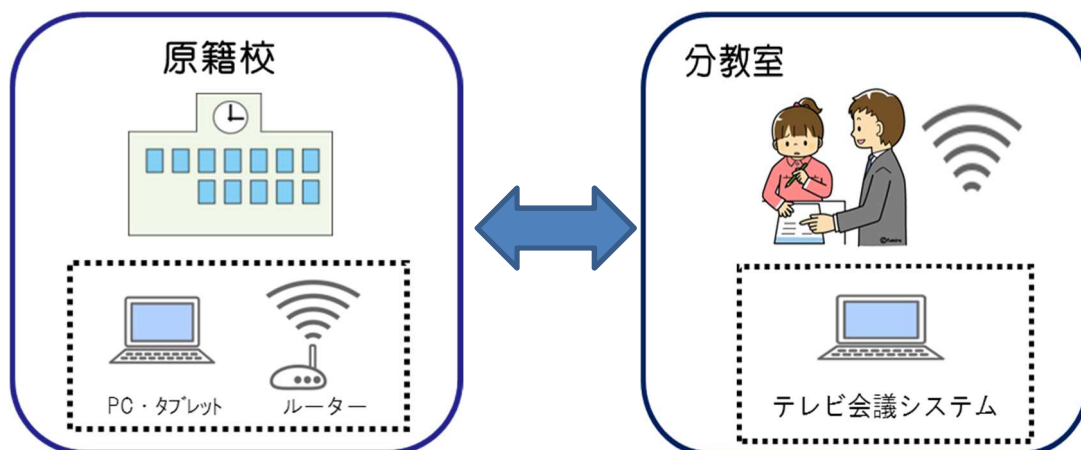
(オ) 入院児童生徒等への復学又は転学を見据えた交流及び共同学習に関する研究

円滑な復学に向けた交流及び共同学習のあり方について具体的な事例を積み上げてきた。当該児童に修学旅行等の主要な学校行事への参加希望が強く、主治医より化学療法のプログラムに参加に合わせて調整してもらい、修学旅行への事前学習といった内容での交流及び共同学習ができた。特に、ここでは、双方向の交流を行うことができる、テレビ会議システムを活用して実施した。

【事例⑤】

原籍校での修学旅行参加に向けての事前学習をテレビ会議で

小学6年生で、入院期間が長引く中、修学旅行に参加したいという児童の思いと医療と教育の連携により一時退院による修学旅行への参加が決まった。主治医の「修学旅行に行けるようにし、治療に対するモチベーションの維持につなげよう」という治療計画のもと、原籍校と分教室指導者が「原籍校の友達と体験を共有することで、治療後のスムーズな復学をめざそう」と話し合った。しかし、治療の関係で、一時退院は修学旅行当日と前後の3日間だけだった。そこで、テレビ会議システムを通して事前学習を実施することにした。



【使用機器・システム】

原籍校	分教室
電子黒板 HDMI ケーブル *コンピュータ *モバイルルーター *マイクスピーカー	コンピュータ マイクスピーカー
テレビ会議システム	

(*印のものは桃陽からの貸出機材)

【取組の様子】

原籍校は、京都市外にあり、テレビ会議の接続経験もなかったため桃陽が支援を行った。

事前学習を行うコンピュータ室は、インターネット接続が可能だったが、教室PCへのテレビ会議システムのインストールは不可とされたため、ノートPCとモバイルルーターを貸し出して接続した。

今回は、一斉授業ではなく、グループ毎の話し合いが主となる授業であったため、事前に学校を訪問し、教室環境の把握と分教室とのテスト通信を行った。また、分教室児童は、予め送られてきた資料で個別に調べ学習を行った。

《事前学習当日の様子》

授業前にテレビ会議の接続を行った後、学級の児童が入室してきた。電子黒板の画面に映る分教室児童に気づいた子ども達は画面に向かって手を振っていた。

本時のねらいは、修学旅行の行先である広島の平和公園での活動計画立案で、グループで活動のめあてについて考え、見学の順番を相談して決めることになっていた。分教室児童の入るグループの机にノートパソコンとマイクスピーカーを置き、それを囲んで4人の児童が座った。マイクスピーカーやキーボードの操作について説明するとすぐに理解し、グループでの話し合いが始まった。何を中心に見学するか、めあてを話し合った後、見学の順番を決めていった。一つ一つを決める度に画面の向こうにいる分教室児童の意見を聞いたり「〇〇でいいか」と確認をとったりしていた。分教室児童も「それやったら遠回りになる」などと自分の意見を伝えていた。

しかし、コンピュータ室にはたくさんの児童が入室し、グループで話し合っていたため声が重なり、分教室児童の声が聞き取りにくかった。原籍校の子ども達は、分教室児童にも聞こえにくいのではないかと考え、一つ一つ紙に書いて見せていた。子ども達自身の知恵である。

無事、グループ活動についての話し合いが終わると、学級の子ども達は画面に向かって一人一人手を振って教室に帰って行った。

分教室児童は、「楽しかった」「(こんなことができて)分教室ってすごい」と話していた。

《修学旅行当日とその後》

入院が長期になったため、原籍校の友達と会うのは久しぶりであったが、この事前学習により、不安が軽減され、参加への安心感や期待感が高まった。

当日は、ずっと学級にいたかのように違和感がなく、修学旅行に楽しく参加することができた。

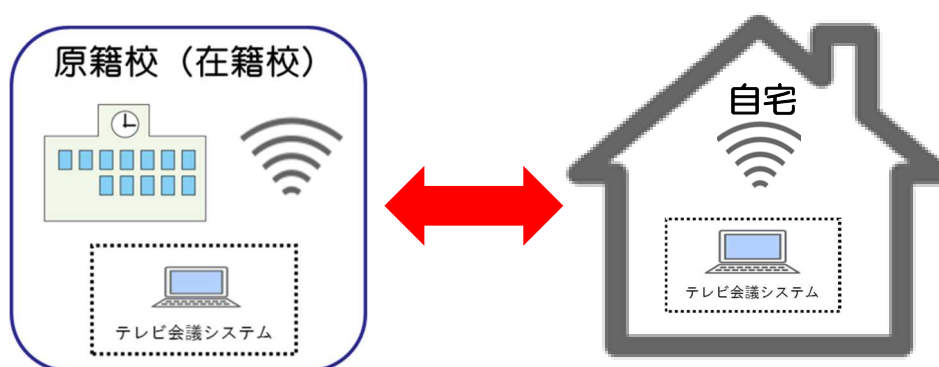
分教室児童は、修学旅行終了後も、治療や学習に前向きに取り組んでいる。また、通常本校主体であった児童生徒会選挙にも副会長候補として立候補し、活躍している。

【事例⑥】

退院後 自宅と在籍小学校をテレビ会議でつないで

治療が終わり退院できてもしばらく自宅で療養しなければならず、在籍校に登校できないケースがあり、自宅と在籍校をICTを活用してつなぐにあたっては、ハードウェア上の問題や、セキュリティポリシーの問題などを、桃陽が在籍校にアドバイスしながら解決し実施した。

小学6年生で、退院・復学したが、体調不良のため登校困難な状態が続いた。生徒は病院分教室在籍時にテレビ会議での学習経験があった。授業を受けたいという気持ちと登校できない不安な気持ちから、少しでも学校の様子を知りたい、クラスのみんと授業を受けたいと考え、本人、保護者がテレビ会議による授業配信を在籍校に要望した。在籍校はその要望に応じ、1日1時間の授業配信を行うことにした。



【使用機器・システム】

在籍校	自宅
電子黒板 コンピュータ 2台 (教室機+1) *Web カメラ 2台 *カメラ用三脚 *USB 延長ケーブル 2本 *マイクスピーカー *USBハブ *教材提示用スタンド	*コンピュータ (貸出) 自宅 Wifi
テレビ会議システム	

(*印のものは桃陽からの貸出機材)

【取組の様子】

テレビ会議では、教室の子ども達の映像も配信することになる。個人情報保護に留意し、学級の保護者に向けて、今回の授業配信について周知する文書を配布し、特に問題はないとの判断で実施することになった。授業配信を行うに当たり、在籍校と自宅への接続支援を行った。

在籍校は京都市立小学校で、京都市教育ネットワーク下にあった。教室には教室PCと電子黒板が設置されていた。

黒板を映すために教室中央に1台、ワークシート等教材を映すカメラを教卓横に設置し、教室PCと他教室から持ち込んだPCをそれぞれのカメラに接続した。音声の入出力については、指導者の声だけでなく、教室の生徒が発表する声なども拾うことのできる集音タイプのマイクスピ



板書(右)と教室(左)の様子を配信

ーカーを使用した。

一方、自宅にはテレビ会議システムをインストールしたコンピュータを貸し出した。自宅に Wifi の無線環境があったため、貸出PCをつなぐことができた。

テレビ会議システムをすぐに立ち上げられるよう、それぞれのPCにショートカットを作っておいた。また、学校や自宅のICT環境に合わせた「テレビ会議接続マニュアル」を用意し、それを見れば基本的な操作がわかるようにしておいた。

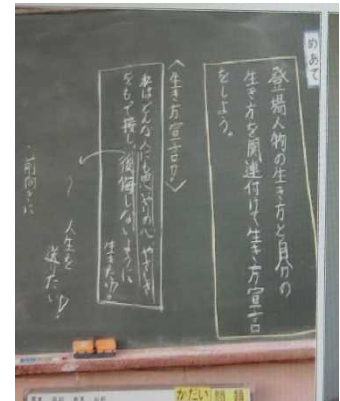
テレビ会議の接続テストと同時に、自宅の児童と学校の担任とで授業配信について打ち合わせを行った。何時間目のどの教科を配信するかを前日に打ち合わせ、1日1時間配信することになった。

授業では、カメラでワークシートを映しながら説明するなど、自宅児童に向けての声かけも行われた。音声が聞き取りにくくなったりすることもあったが、在籍校の授業を受け、学級の様子を知ること、学校や友達とつながっている安心感を持つことができた。

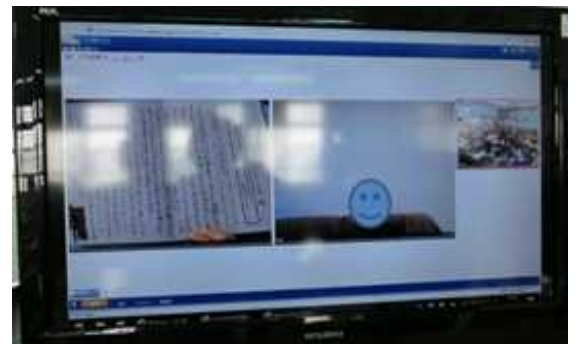
【本人・保護者の感想】

学校に行けなくても、毎日1時間の授業を受けるのが楽しみで、励みになっています。

からだがしんどい時も、その時間になったらパソコンに向かっています。学習にも前向きになって、テレビ会議の授業以外にも自分で勉強をするようになりました。音は聞こえにくいこともありますが、つながっていることが何よりうれしいです。(保護者)



板書もクリアに配信



ワークシートを映して説明(左)

(3) 入院児童生徒等への基本的な支援の流れ(フロー図)

別紙1 参照

(4) 実施スケジュール(実績)

別紙2 参照

3. 事業の課題と今後の方策

【体制整備・連携方法について(公募要領(イ))】

<課題>

○ 分教室設置病院との連携・協力体制の充実

分教室設置病院小児科以外の診療科の入院状況や、分教室設置病院以外の児童生徒の入院状況については、リーフレット等の配布により一定進んできてはいるが、それでも把握が困難である。市立小中学校・高等学校、京都府立高等学校等へ周知するため、校長会などで説明を行っているところである。今年度の研究報告会には、小中高等学校を所管する教育委員会の担当課や、児童支援を行う府や市の部局の担当者の参加もあった。そういった関係部局等とも連携しながら、理解・啓発のあり方について検討しているところである。

京大病院，府立医大病院においては，医療ソーシャルワーカーが配置されている。京都市内のどの病院においても，一定期間の入院が必要な児童生徒とその保護者や在籍校に対して情報提供を行い，ニーズに応じて関係者のケース会議等を持てるよう，病院・学校をつなげコーディネートする人員が求められる。

これまでは，それを支援部の業務として教職員で行ってきたが，分教室や訪問教育での授業の計画・実施や支援とともにコーディネーターとして幅広く臨機応変に対応することには困難がある。また，子どもの支援にかかわる教育委員会以外の市の部局とも連携していくことが考えられる。

○ センターの機能活用に係る小・中・高校生等への学習支援に係る人材の確保

総合支援学校に籍を移さない入院中の小・中学校児童生徒や高校生の学習支援のためには，総合支援学校の教員による支援に加えて，学習補助を行うボランティア等の人材確保が不可欠である。また，病院との更なる連携を図るために，医学生や看護学生の協力も得ているところであり，こうしたつながりが，将来的な教育保障体制整備に貢献していくものと思われる。他にも，学校関係者の側からも引き続き，特別支援学校の経験者等の退職教員にも裾野を広げて人材確保に努めていく必要がある。

<今後の方策>

①入院している高校生のニーズの把握等情報収集とコーディネートに関する研究

- ・病院スタッフとの連絡会議の充実
- ・病院と在籍校をつなぐ連絡・連携のあり方

②高校生の学習のモチベーションを維持するための学習会の設定やボランティア等の人材活用の研究

- ・ICT環境活用等の工夫による学習会の内容の充実
- ・ボランティアの有効な活用と連携

③在籍高校等との連携のあり方の研究

- ・入院してくる生徒のニーズや高校の特性に合わせた連携のあり方(復学支援や遠隔教育等へのサポート等)

これまでに引き続き，桃陽と京大病院，府立医大学病院と提携した学習会を実施するとともに，単位の取得にかかわるものも含めて，在籍高校と連携した取組を行う。現在，分教室に在籍し高校に進学する予定の生徒がいるが，入学後も入院を継続する可能性が高く，入学が決定した高校の持つ条件と治療上の条件のもとで，登校にあたっての支援を模索する。また，こうした取組の実績等について，京都市立高校や京都府立高校，京都府下の私立高校等への周知のため，校長会での紹介等の実施を検討する。

【教育機会確保について（公募要領（工）・（オ））】

<課題>

○ 原籍校が病室等をICTでつないで授業や交流を実施できるような活用環境づくり

- ICT活用については，学習保障や交流において有効であることが明らかになり，機器の設定等においても一定のノウハウが蓄積されつつある。今後は，原籍校に対して病弱教育への理解を求めていくとともに，原籍校が無理なく，学習保障の一つの手段として，ICTを活用した授業の配信や児童生徒の交流を進めるために，例えば，病弱支援学校のセンター的機能として，支援部が機器を貸し出したり，教員が接続や運用や児童生徒への配慮に関するアドバイスをするというようなことも考えられる。

○ 退院後の自宅と在籍校を繋ぐ取組の充実

分教室のある病院から退院し元の学校に学籍に戻ったものの，体力の回復や感染症の防止のためにしばらく在籍校に通えない児童生徒がいる。これまで，ICTを活用した在籍校と自宅との接続を，機器の貸し出しも含めて支援してきたところである。

しかしながら，一般の小中学校においては，タブレットパソコンやリモートカメラ等を教室に導入するにあたり，機器操作の担当をどうするのか，他の児童生徒のプライバシーについて，他の児童生徒への説明について等，クリアしていかなければならない課題が多々ある。また，現状においては本人の安心や学習モチベーションの維持といった点で機能しているところである。学習を保障するという意味においては，

病弱の児童生徒への合理的配慮の一環であると考えられるこれらの支援について、今後とも在籍校の実情を踏まえた実施のあり方について整理するとともに、啓発に努める必要がある。

<今後の方策>

①病室から出られない児童生徒や訪問教育の対象である児童生徒の学習におけるテレビ会議システム等を活用した学習集団づくり

病状により病室から出られず分教室での学習に参加できないケースや、同学年の在籍がない分教室、訪問教育においても、主体的な学びにつながる集団での学習を保障するために、テレビ会議システムを活用して、分教室や桃陽本校の同学年生徒とつなぐ取組を行う。

- ・特に各教科の学習について、集団学習を行うにあたっての学習内容の選択や双方の事前の調整等について整理する
- ・主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善を目指したソフトウェアの活用について、モデルケースを構築する
- ・病室等の側での主体的な児童生徒のツールの活用を進める支援のあり方の検討
- ・病室等の側での支援者（ボランティア等）の活用のあり方についての検討
- ・学習時間不足を補うためのアプリケーションの利用やビデオ教材の活用のあり方の検討

②退院後、在籍校への登校ができない状態の児童生徒の支援について

退院後、自宅療養が一定期間ある場合、本人の復学に向けての不安の軽減を図り、学習空白を可能な限り少なくするために、テレビ会議システムで在籍校とつないだICT活用について試行している。分教室退院時のカンファレンスで、復学する学校と連携しながら保護者・本人への説明を行うことや、ネット接続に関する支援や機器の貸し出す等の実施までの準備段階で必要なこと、また、実施時の効果（本人の変容等）と、周囲の反応やコスト等についてまとめ、今後の支援のあり方について検討する。

③在籍高校と高校生をつなぐICT活用等をはじめとした支援について

それぞれの生徒のニーズや、在籍高校の履修内容、ICT環境の状況等を踏まえた、病院と高校をつなぐために必要なICT機器の設定や病院との調整等、支援のあり方を検討する。